

ミサイルよりくらしを

九州9条連共同代表 友田 良子

6月14日鹿児島中央駅東口広場で「ミサイルよりくらしを!! 戦争NO! 6.14 かがしま集会」が開催され、大雨注意報のなかにも関わらず、傘を手に60人余が集まりました。

台湾有事(対中戦争)を煽りながら、戦争準備が憲法を無視し県民の意に反して着々と進められています。

世界では、ロシア軍のウクライナ侵攻は停戦の見通しは全く立たず3年目



に入り、イスラエル軍によるガザへの攻撃は、不条理ともいえる大量虐殺が続いています。また、最近の核兵器保有のインドとパキスタン武力衝突、緊張が続く朝鮮半島や中国と台湾の関係は、国際社会の深い分断と対立の冷戦構造にとどまらず、世界大戦につなが

りかねない極めて危険なリスクをはらんでいます。

こうした戦争体制づくりに反対する行動をする、そして県民のみなさんにこの状況を知ってもらいたい、と思いこの反戦集会に参加しました。

集会では、馬毛島基地の建設や海上自衛隊鹿屋基地への無人機配備、奄美大島の自衛隊基地への中長距離ミサイルの配備、さつま町などへの弾薬庫建設などの報告を受けました。私は、知ることが、共に活動する、行動する第一歩だと思います。

核兵器禁止条約 日本も

長崎の被団協代表委員の田中重光さんは、「米国はいかに非人道的なことをしたか分かり、被爆実験を覆い隠した。日本政府もその状態を放置したため、被爆者は誤った情報で差別と偏見にさらされた」などと苦難や原水爆禁止運動の歴史を紹介し、「ノーベル平和賞受賞は、いま核兵器が使われる日が迫っている。もう一度被爆者が体験を語り、世界中の人たちに核兵器を使った後の惨状・現実を再認識してもらおう意味が

ある」と話した。そして、「核兵器禁止条約に日本も参加せざるを得なくなる空気を国民の力でつくり、政府に圧力をかけてほしい」と訴えられた。

市民の会 町議当選

さつま町の地域住民に知らせることなく、2018年から町商工会や町議会が自衛隊施設の誘致を展開してきた。防衛省は2024年度予算に、自衛隊基地がない同町に調査費10億円を計上。昨年12月に中岳周辺での弾薬庫新設を正式に表明し、2025年度予算案に設計費2億円を盛り込みました。「さつま町の弾薬庫問題を考える市民の会」は、昨年3月議会に、自衛隊施設の誘致活動を中止するよう求める陳情を提出したが、全会一致で不採択になった。また、今年3月14日にも町長と町議会議長に、「弾薬庫の危険性を憂慮する県民の声にも耳を傾けてほしい」との要請書を提出してきた。

これまで、弾薬庫整備に異議があっても、紹介議員になってくれる議員がおらず整備反対の請願を出すことさえできなかった。しかし、今年4月13日投開票の町議会議員選挙で、市民団体の「武 さとみ」氏が当選。(14人中4位)

今後の「弾薬庫の建設反対」活動の大きな力になるとの報告でした。

壊滅的な自然破壊

西之表市の報告は、「まず馬毛島の今の状況を見てください」と写真(同封チラシ)を渡されました。そこには緑の大地も動物も見えませぬ。戦場の準備が

続けられていると分かる工事現場しかありません。町では、工事関係者、自衛隊関係者など人が増え続け、住宅問題日々の暮らしなど住民の生活環境はますます悪化している。「農業」「漁業」は取り返しのつかない程壊されていく状況の報告がありました。

海自鹿屋基地では、いつ飛んでくるかわからない「米軍無人機」への監視や自衛隊強化の監視などの活動で、少々疲れているという報告でした。

知ってほしい! 怖いことが始まった

奄美大島報告は、50年前に私たち家族が暮らした自然豊かな海。「ハブ」は怖かったけど、亜熱帯樹林で楽しく過ごした日々を思い出し、とても辛い気持ちで聞きました。

生息する樹木は世界中から研究者が来るほどの大切な樹林です。海は亜熱帯にしか生きられない魚の宝庫です。それらを壊して市街地近辺は自衛隊駐屯地、宿舎、弾薬庫、ミサイル基地が整備されている。住民の「反対の声」、意見書も「お願い」をも無視して出来上がった「戦争準備の場」。そして始まったのが米軍と自衛隊との軍事演習・合同訓練。徳之島、喜界島、与論島で毎年交代で行われています。そして、その役場の町職員が自衛隊駐屯地に体験入隊する。これほど怖いことが日常化しているのです。

多くの人々に知ってほしいのです。「怖いことが始まっている、日常化している」ことを知ってほしい。

誰も殺されない、誰も殺さない、誰も殺させない

那珂川市在住 宮原徹朗

JR 佐賀駅で合流して会場の佐賀空港グランドに車で向かう。市街地を抜けてから広大な佐賀平野をまっすぐ15分ほど有明海方面へ南下、異様な黒っぽい塊がぐんぐん迫って来た。佐賀空港横に建設中の自衛隊庁舎（8階建て）とわかり、白っぽい格納庫も3棟ならんでいて、周辺はまだ突貫工事中で重機が砂埃をあげ、作業員の姿が見



えた。車を左折して駐屯地すぐ隣の佐賀空港ビル（2階建て）と管制塔を右に見て過ぎ、抗議集会会場に着いた。

オスプレイ裁判支援市民の会の主催で参加者 620 人以上。オスプレイ裁判とは駐屯地建設用地の地権者4人が建設中止を求めている訴訟のこと。集会のあと駐屯地までデモをし、中で作業をしている建設作業員たちへも訴えた。少し長くなるが『集会アピール』冒頭から引用する。

平和への希求と祈りを踏みにじる

「私たちは本日、佐賀空港の軍事基地化と、欠陥機オスプレイ配備に反対するために、九州各地はもとより、全

国から集まった市民有志です。私たちはいかなる理由があつたとしても軍事行動にも戦争にも反対します。戦争になれば被害を受けるのは一般市民です。基地は相手国の標的となり、住民を守りません。佐賀空港が建設された時、戦争の悲惨さを骨身に感じていた世代の漁民たちは、平和への思いを込めて「自衛隊との共用はさせない」との文言を盛り込んだ「公害防止協定」（1990年3月30日、筆者註）を佐賀県との間で結びました。ところが2018年8月24日、山口祥義県知事は、防衛省が計画する佐賀空港西側の土地への駐屯地新設と、オスプレイ17機の配備計画受け入れを表明しました。このことは佐賀県知事と防衛省による、漁民たちの、平和への切なる希求と祈りを、いとも簡単に踏みにじる暴挙にほかなりません。」

海兵隊が乗り込んでくる??

さらに集会に参加してわかったことをあげると以下の通り。

1. 漁業者個人に所有権がある土地なのに漁協内での多数決で用地売却を決めるといふ、あってはならない行為により、防衛省の基地建設が強引に始められた。
2. 駐屯地で発生する様々な廃水の貯留池工事と基地建設は関係ないとの詭弁（防衛省と佐賀県の）で、汚染を心配する有明ノリ業者の環境アセスメント実施要求を拒否。
3. 駐屯地建設用の盛り土として、県民

の財産である土地と土砂を無償提供した佐賀県。

4.駐屯地周辺海域は、世界的にも貴重な生態系を育ててきた干潟で、ラムサール条約湿地に指定されている。

5.基地の運用が始まり、年間 17000 回もの離発着訓練が繰り返されれば、騒音・排水などによる命と環境への影響は甚大。環境アセスメントは大変重要。永年海苔業を営んでこられた漁民の方々にとっては死活問題。

7月9日に、暫定配備基地・木更津駐屯地からオスプレイを1機移駐させて、佐賀駐屯地発足のセレモニーが準

備され、8月中頃までに全 17 機が配備される。陸自相浦駐屯地(佐世保市)と同竹松駐屯地(大村市)の「水陸機動団」(日本版海兵隊)と連携して動くといわれるが、しかしいまだにその具体的中身はあきらかにされていない。また「台湾有事」を煽りながら進められている自衛隊と米軍が一体となった訓練もあり得るし、海兵隊が乗り込んでくることも。

「誰も殺されない、誰も殺さない、誰も殺させない」と集会アピールにあった。日常の心構えとして生きていこうと思う。

戦時の狂気 語り継ぐ

6月14~15日、第15回平和記念資料展が福岡県教育会館で開催された。同資料展の実行委員を務めている九州9条連会員のお誘いで、4名参加した。

1945年6月19日、米軍の爆弾・



焼夷弾によって福岡市中心部が一夜で焼け野原になった「福岡大空襲」から19日で80年。記憶の継承が課題となる中、大空襲をテーマに資料展を開いてきた団体(県退職教員協会福岡支会等)が、体験者9人から聞き取った証言のパネル展示し、体験者の証言もあった。

福澤信子さんは、「火の中を、長さ34cmある先祖代々の位牌を包んだ風呂敷を背負い逃げ惑った。貨車の車輪の間で疲れて眠りこみ一夜を明かした。最初に避難した十五銀行では大勢が亡くなった。ぎゅうぎゅう詰めの列車で母の里糸島に到着、飲んだヤギの乳は、一生忘れられんごとおいしかった」と語った。

さまざまな取り組みがある。熊本小国町に墜落したB29搭乗員も含めて建立されている「殉空の碑」、福岡油山でも米兵捕虜処刑について慰霊法要が行われた。被害だけでなく加害責任にも焦点を当て、痛ましい過去と向き合い、敵味方なく平和を誓いあう催しが各地で開催される。ぜひ足を運び体感しよう。友田代表が訴える「知る」活動がいま九州9条連に求められている。